災害ボランティアの現場経験から学ぶ在宅避難
（団体名称：おゆみ野四季彩の杜防災会）

活動内容

全国の被災地で長年支援活動を続ける森下良治氏を招き、能登半島地震・東日本大震災などの現場経験に基づき、「在宅避難」「共助」について学びました。
報道では見えにくい被災地の実情を知り、地域としてどのように備えるべきかを確認しました。
また、防災会が保有する災害用簡易トイレの組み立て実演を行い、災害時の必須設備を体験しました。

【取り組み内容】

- 炊き出しや自宅避難者の孤立など、現場の実例を共有し、「温かい食事」と「集まれる場」の重要性を確認。
- 倒壊家屋での貴重品捜索事例を通じ、「残してほしい物」を平時から家族で整理し、取り出しやすい場所にまとめる必要性を認識。
- 豪雨による内水氾濫や床下断熱材の腐敗など、現代住宅特有の浸水リスクを学び、地域としての浸水想定確認につなげた。
- 倒壊家屋救助の約 8 割が近隣住民であることから、バールや発電機・蓄電池などの共助ツールの備蓄・保管場所の共有について意見交換。
- TKB48（トイレ・キッチン・ベッドを 48 時間以内に確保）を理解し、行政だけでなく、地域での避難所機能づくり・役割分担の必要性を学んだ。

講演風景

簡易トイレ、携帯トイレの設営

ポイント

- 現場での具体例を通じ、「この地域でも起こりうる災害」として自分事化できました。
- 公的支援が届くまでの 72 時間を生き延びるには、近隣同士の共助と、道具・電源・炊き出し用品などの事前準備が極めて重要であることを再確認しました。

その他

参加者からは「在宅避難の現実を初めて実感した」「道具リストや物資仮置き場を地域で決めたい」といった声が上がり、今後の防災計画・避難所運営マニュアルの改善に活かしていく予定です。